

芸術祭が始まる

東京藝術大学美術学部絵画科准教授
アーツ前橋チーフキュレーター

みやもと
宮本

たけのり
武典

⑦ 近藤春奈さんの

《Bonework / 骨組みをなぞる》

9月13日（土）から28日（日）まで、有鄰館で東京藝術大学油画専攻による桐生アートリサーチ報告展「REAL TIME IN KIRYU 2025」を開催しました。来年11月に第1回を立ち上げる新たな芸術祭「桐生AIR」の実践シミュレーションとして、16人の藝大生が桐生での取材・制作に挑みました。

近藤さんの巨大な絵画作品《Bonework / 骨組みをなぞる》は、絵の具ではなく、銭湯「一の湯」のまきボイラーからかき出した灰やすりで描かれています。その土地でモチーフを見つけ、その土地の素材で制作し、その土地の人々に見せるために展示する地域の人々と積極的に関わった彼女だからこそ、このプロ

グラムが理想とするAIRのプロセスを体現してくれたと思っています。

▶ まきボイラーから材料となる灰やすりをかき出している様子

▼ 灰やすりで描いている様子



「桐生AIR」のAIRとは、Artist in Residenceの略で、アーティストが異環境に滞在して行うリサーチや創作を支援する事業のこと。受け入れる地域側は文化資源の掘り起こしや国際交流につながるなど、相互にメリットがあります。10月から上野キャンパスで後期の演習が始まり、僕も学生も息つく間もなく忙しくしています。この夏の活動をしつかり振り返り、来年に本格始動する「AIR」事業の環境整備を進めていくつもりです。学部2年の近藤春奈さんは準備も含め、今回最も長期間、桐生に滞在してくれた学生です。彼女は中央大学国際経営学部で国際支援を学んだ後、東京藝大油画専攻に入学生というユニークな経歴の



▲近藤さんの作品
《Bonework / 骨組みをなぞる》

先日、近藤さんをはじめ運営を手伝ってくれた学生たちの慰労会を上野のアメ横で開きました。彼らが1か月暮らした重伝建の路地とは真逆のアメ横の混とんを背に「もう桐生に帰りたい」「東京の方が非日常に感じる」と言う学生たち。その言葉を聴きながら、不確実性の増していく社会の中で才能ある若者たちが貴重な数か月を桐生に投じてくれたことを、僕はしみじみとありがたく思ったのでした。

パチリいい顔

桐生っ子

市内に居住する3歳まで（申し込み時）の桐生っ子を募集します。

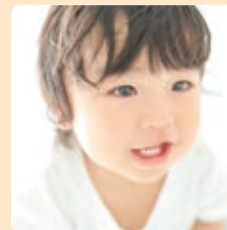
詳しくは、市ホームページをご確認ください。
問い合わせ = 魅力発信課（☎46-1049）



かめやま にこ
亀山 笑瑚ちゃん
3歳2か月
（宮本町四丁目）



たけ の の あ
武 叶々愛ちゃん
1歳6か月
（広沢町二丁目）



そのだ おうた
園田 桜大ちゃん
1歳5か月
（本町五丁目）



よしだ さか
吉田 さち花ちゃん
3歳5か月
（相生町二丁目）

広告